

富山県氷見市

堀田西谷内遺跡試掘調査報告書

1988年3月

氷見市教育委員会

例　　言

1. 本書は、県営広域営農団地農道整備事業（水見2期地区）に伴う、富山県水見市堀田西谷内遺跡の試掘調査報告書である。
2. 調査は、富山県耕地課と水見市が費用を負担し、水見市教育委員会が実施した。
3. 調査は、水見市教育委員会社会教育課学芸員大野一究が担当し、社会教育課課員の協力のもとにこれを実施した。
4. 調査事務局は、水見市教育委員会社会教育課に置き、課長代理反野幸正・主事竹越善和と大野が調査事務を担当し、課長渡邊憲一が総括した。
5. 本書の編集・執筆は、大野が担当した。
6. 遺物は、水見市立博物館が保管している。
7. 調査および本書の作成にあたって、以下の方々や機関から協力をうけた。記して謝意を表わしたい。（順不同・敬称略）
　　漢　義、高岡　徹、山岸太一、秋山進午、宇野隆夫、西井龍儀、小境京治、岡本基一、
　　田中　恵、東海春美、富山県埋蔵文化財センター、富山県高岡農地林務事務所
　　水見市立博物館、(株)中越土木

目　　次

1. 位置と環境	1	第3図 土層模式図	3
2. 調査に至る経緯	2	第4図 堀田城略圖概念図	7
3. 調査の概要	2	第5図 神代城略圖概念図	9
4. 調査の成果	2	第6図 堀田大久前遺跡出土須恵器 杯蓋転用碗	11
(1) 層位	2	第7図 堀田地区周辺の小字	13
(2) 遺物	3		
5. 堀田地区周辺の遺跡について	5	表 目 次	
6. 結び	10	第1表 堀田周辺の遺跡の年代	10
註	12	図版目次	
参考文献	12	図版1 遺物実測図(1)	
挿図目次		図版2 遺物実測図(2)	
第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡	1	図版3 遺跡写真・遺物写真(1)	
第2図 調査区	2	図版4 遺物写真(2)	
		図版5 遺物写真(3)	

1. 位置と環境（第1図参照）

水見市は能登半島の基部にあたり、富山県の北西部に位置している。市の南西方面に標高637mの宝達山がそびえ、ここを基点として北東方面に宝達丘陵がのび、東方面には二上山丘陵がのびている。宝達丘陵は、水見市と石川県との境界線をなしながら石動山にいたり、これより石動山丘陵となって崎山半島を走り、海岸線に達している。一方二上山丘陵は、水見市と西礪波郡福岡町・高岡市との境界線をなして、次第に低くなりながら海老坂峠に達している。さらにここからは標高が高くなり、二上山ブロックとなって、その先端は海岸に急斜している。水見市は、これらの丘陵から派出する小丘陵により、西条・十三谷・上庄谷・八代谷・余川谷・瀬浦の6つの区域に分けられている。また市の東側は、約20kmに渡って海岸線を形成しており、この中央付近に市街地がある。

堀田西谷内遺跡は、市街地の南南西約6km、二上山丘陵から派出する小丘陵に挟まれた細長い谷の中に位置する。谷の大部分は水田で、谷を出た北側に堀田集落が所在する。谷の東側尾根には、海老坂集落を抜けて高岡市街に至る山道があり、この道は昭和初期まで使われていた。^{註1}



第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡 (1/25,000)

- | | | | |
|---------------|----------|------------|--------------|
| 1. 堀田西谷内遺跡 | 5. 館ノ山塚 | 9. 馬乗山遺跡 | 13. 矢ノ方一丁田遺跡 |
| 2. 堀田城跡 | 6. 田子遺跡 | 10. 堀田古墳群 | 14. 神代城跡 |
| 3. 堀田大久前遺跡 | 7. 多胡城跡 | 11. 神代羽連遺跡 | 15. 光西寺山古墳群 |
| 4. 堀田なんまいだ松古墳 | 8. 四十塚遺跡 | 12. 石崎遺跡 | 16. 飯久保城跡 |

2. 調査に至る経緯

堀田西谷内遺跡発見のきっかけは、昭和55年10月の水田水路工事である。この工事で土器が多数出土しているのを地元山岸太一氏が発見し、児島清文氏（故人、元水見市文化財審議会委員）と共に採集された。

これを受けて市教委では、昭和58年発行の遺跡地図に本遺跡を登録^{註2}している（水見市教委他、1983）。

遺跡として登録した地点は、かねてより計画されていた、県営広域宮農園地農道整備事業の予定地と一部重複するため、市教委と県高岡農地林務事務所・県埋蔵文化財センターの三者で遺跡の取扱いについて、協議を行なった。その結果、昭和62年度に、遺跡の範囲、状態を確認するための試掘調査を行なうことになった。

3. 調査の概要（第2図参照）

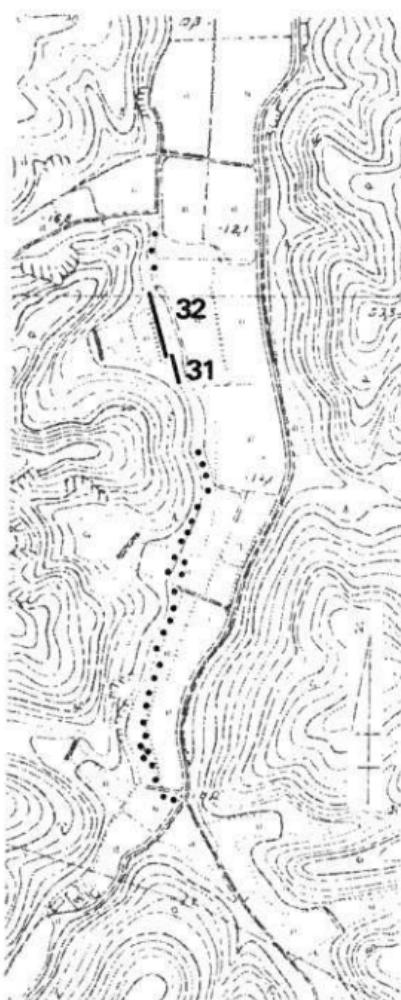
調査は遺跡として登録した地点を中心に、農道予定期間約500mを対象とし、地形に応じて2×2mのグリッドを33ヶ所、また工事で土器が出土した附近には2m巾のトレンチを2ヶ所（31・32トレンチ）設定し、地山面までを対象に掘り下げた。

調査の結果、遺構は確認されず、31・32トレンチから、わずかに遺物が出土した。

4. 調査の成果

（Ⅰ）層位（第3図参照）

調査区の層位は、第1層が15~30cmの表土（耕作土）であり、第2層が20~70cmの褐色土と青色粘土の混ざり合う層であり、第3層が青色粘土の地山であった。第2層は、褐色土の割合の高い層と、青色粘土の割合の高い層とに二分でき、第3層は深くなるにつれて暗青色になる。尚、第2層は自然石や植物体が混入した擾乱層で、この擾乱は過去に何度か現地を襲った、集中豪雨による災害が原因



第2図 調査区（1/5,000）

と考えられる。

(2) 遺物

試掘調査で出土した遺物と、昭和55年に採集された遺物を合わせて紹介する。遺物の量は両方で整理箱5箱分であるが、図化したものは以下の46点であり、図化しなかったものの大部分は、土師器細片である。尚、試掘調査で出土した遺物は全て第2層からの出土であり、出土したトレンチを示すことで、採集品と区別してある。また遺物は種類別に示してある。

須恵器（図版1、1～13）

須恵器は全て古代のものであり、杯B蓋・杯B・杯A・碗A・壺・甕がある。焼成はおおむね良好であり、胎土は白色砂粒を含むものがある。色調は青灰色のものが主である。ロクロの回転方向が読みとれるものは、いずれも右回転である。

1は杯B蓋で、頂部に平坦面を持ち、肩がはって口縁部に移る扁平な器形であり、口縁端部は下方に折れる。頂部外面は幅の広いヘラケズリを施して、径2.4cmの宝珠形つまみがつく。口径は14.0cm、器高は2.0cmである。内面にヘラ記号がある。

2～6は杯である。2は高台のついた底部から丸みを帯びて体部が立ち上がり、口縁部がやや外へ開く。調整は主としてロクロナデにより、高台付近にはヘラケズリを施す。高台は粗樫な作りであり、底部外面にヘラ記号がある。口径12.8cm、器高3.5cm、高台径8.4cmである。3は口径13.9cmのやや深い器形のもの。4・5・6は底径8～10cmの杯Aである。

7は蓋である。頂部からほぼ直角に折れて口縁に至る器形であり、外面に自然釉がかかる。8は長颈壺の肩部。外面に自然釉がかかり、内面には成形時の粘土巻き口痕が残る。9は壺の肩部であろう。幅約0.8cmの突帯を貼り付け、外面に自然釉がかかる。31トレンチから出土した。

10は糸切り離し手法による杯Aないし皿Aの底部であり、底径は5.8cmである。

11～13は甕の胴部片である。11・12は内面に同心円文、外面には3cmあたり6～7本の平行タタキを施す。11の外面はかなり摩滅している。13は内外面とも平行タタキであるが、内面は単位が細かい。12は32トレンチから出土した。

以上の須恵器の時期は、1が最も古く8世紀後半頃であり、10が10世紀頃と最も新しい。他の資料も8世紀後半から9世紀頃に位置するものであろう。

尚、7・8・9は灰釉陶器である可能性もある。

土師器（図版1、14～29）

土師器は古代と中世のものであり、皿A・甕がある。14・15のみがロクロ成形であり、他はすべて非ロクロの手法による。焼成はおおむね良好であり、胎土はほとんど砂粒を含まない。



第3図 土層模式図

色調は赤茶褐色のものが主である。

14は口径21cmの器であり、かなり摩滅しているが、胸部内面にカキメ痕が残る。口縁はゆるく「く」の字状に外反する。端部は面をとり、やや立ち気味であり、内面が肥厚する。

15は皿Aないし碗Aであろう。摩滅が著しく調査は不明であるが、糸切り離しによる製品であろう。31トレンチから出土した。

これらロクロ成形による上飾器の時期は、9世紀頃であろう。

16~24は皿Aであり、口径は9.9cmから13.6cm、器高は2.6cmから3.2cmである。いずれも口縁部に1段の横ナデを施す。やや内湾し、端部の丸いもの(24)、面取りを施し、やや内湾するもの(20~23)、直線的で底部との境が屈曲するもの(18)、端部を内につまむもの(17)、やや外反するもの(16)、などがある。また、16・17・21は底面が内側にわずかにくぼむ。

25~29は小皿である。いずれも体部下半に1段の横ナデを施すことなく、底部との境をなす。25には油煙痕が残る。

これらの皿は畿内系のものであり、宇野隆太氏の研究による、平安京IV期新段階から中世京都II期古段階に主体をなすタイプのものである〔宇野他、1981〕。これらの段階では、時代が下がるにつれて口径が小さくなり、口縁端部の面取り手法がすたれる傾向にある。時期は12世紀末から14世紀初めに比定される。

中国製器（図版1、30~34）

青磁（30・32・34）と白磁（31・33）がある。

30は青磁碗で、外面に鶴亀文を施す。胎土は灰色を呈し、薄青緑色の釉がかかる。口縁部は昭和55年の採集品であり、底部に近い破片は32トレンチから出土した。同一個体と思われる。口径19.0cm、底径 7.0cm。龍泉窯の系統を引くと思われ、13世紀後半から14世紀初めのものと考える。

31は白磁碗で、白灰色の胎土に灰色の釉がかかる。口縁部には釉がかからず、いわゆる「口はげ」のものである。口径は14.0cm。13世紀後半から14世紀のものと考える。

32・34は青磁碗である。32は薄褐色の胎土にオリーブ色の釉がかかる底部片。内側中央に「上」の字形の型押し痕が残る。底径は4.9cmである。34は灰色の胎土にオリーブ色の釉がかかる口縁部片であり、貫入が弱く入る。共に龍泉窯の系統を引くものであろう。34は31トレンチから出土した。年代は共に14世紀頃であろう。

33は白磁とするには問題があるかもしれないが、一応ここに分類しておく。口径 9.9cmの小皿で、灰色の胎土に黄味がかかった釉がかかる。

珠洲焼（図版2、35~43）

珠洲焼は、すり鉢・盆・大甕がある。胎土はわずかに白い砂粒を含み、焼成は良好である。色調は青灰色・暗青灰色である。

35~38はすり鉢である。35は口径26cmのやや内湾した器体をもち、口縁端部は水平に面を取

る。おろし目はない。36は35とはほぼ同器形であるが、体部に較べて口縁部と底部が厚くなる。口径27.0cmであり、6条のおろし目がある。35と36は珠洲II～IV期のものであろう。37は底径12.0cmであり、約13条のおろし目で埋め尽くす。31トレンチから出土した。38は底径12.0cmであり、おろし目はない。

39は口径20.3cmの壺であり、口頭部は「く」の字状に屈折し、頭部から一段下がってタタキ目を施す。珠洲II期のものであろう。

40・41は壺の肩部片であろう。外面に綾杉状のタタキ目を施す。珠洲II～III期であろう。

42・43は大甕である。42は口径64.5cmであり、口径と肩部最大径の差が少ないタイプである。珠洲IV期のものであろう。43は口径57.0cmで、肩部最大径が口径よりひと回り大きい。珠洲III期のものであろう。

その他(図版2、44～46)

44は中世の鉢と思われる。白灰色を呈し、白い砂粒を多く含む。口径は30.0cmである。

45は壺の口縁部片。暗赤褐色を呈し、口縁端部を1.8cmほど外側に折り返す。

46は壺の肩部片。外面に薄緑色の釉が薄くかかり、横位置の耳を張り付けた跡がのこる。中世漁戸焼の四耳壺であろう。

以上の遺物により、堀川西谷内遺跡が存続した時期は、8世紀後半から10世紀頃と、13世紀前後の2時期であると推定できる。

5. 堀田地区周辺の遺跡について(第1図参照)

堀田地区周辺では旧知の遺跡に加えて、最近數カ所の遺跡を新たに確認している。ここでそれらの遺跡を改めて概説し、整理しておきたい。

四十塚遺跡

下田子の藤波神社裏手の標高約40mの丘陵上に位置し、昭和30年5月、耕作中に遺物が大量出土して発見された。昭和30年と34年に水見高校歴史クラブが発掘調査し、その後昭和45年に工場建設に伴う緊急調査が行なわれ、消滅した。時期は縄文時代中期～晚期と古代であり、中心は縄文後期～晚期初頭である。また、地元の人によれば、ここにはかつて古墳が存在し、勾玉などが出土したという。

神代羽連遺跡

昭和38年、耕地整理事中に土器が出土した。石斧・石鍤・弥生土器・土師器・須恵器が、水見高校歴史クラブによって採集されている。時期は弥生後期から9世紀頃までであろう。

矢の方一丁田遺跡

昭和38年、排水溝工事中に土器が出土し、水見高校歴史クラブによって採集された。いずれもも影形式期の土器であり、器種は壺・壺・台付壺・蓋・器台である。

馬乗山遺跡

昔から丘陵南側斜面より土器が出土しており、昭和38年に水見高校歴史クラブが現地踏査を

行なっている。このとき、占墳時代初期の土師器片を採集しているが、詳細は不明である。

石崎遺跡

昭和53年に、ほ場整備事業に伴う事前調査が行なわれ、土師器・須恵器・珠洲焼が出土している。古代から中世にかけての遺跡であろう。

堀田古墳群

小字「ウラカツマ」の丘陵上に、かつて方墳が2基存在していたという。そのうちの1基は20m四方の規模であったというが、現在は病院の敷地となり両者とも消滅している。一方、県道を挟んだ南側丘陵上にも、円墳と思われるマウンドを2ヶ所確認した。ひとつは径約22m、高さ約5mであり、二段築成と推定できる。もうひとつはそのまま南東に位置し、径約8m、高さ約0.5mを測る。

光西寺山古墳群

神代と飯久保の境をなす丘陵上に、古墳群を新たに確認した。この丘陵は、現在市内長坂に所在する東旭山光西寺が、天正2年(1574)から寛政2年(1790)まで所在した山であり(高森、1985)、現在も「光西寺山」や「光西寺屋敷」と呼ばれている。古墳は現在3基を確認しているが、周辺部にマウンド状の高まりがさらに数ヶ所確認され、丘陵全体の確認調査が必要である。確認した3基はいずれも円墳であり、標高64.5mの地点に、径約14m、高さ約2.0mの仮称1号墳が存在し、そこから十三中学校方向に延びる尾根上に、仮称2号墳(径約7.0m、高さ約0.5m)と仮称3号墳(径約7.8m、高さ約1.0m)が存在する。

堀田なんまいだ松古墳

昭和55年11月に確認された円墳であり、径約21.0m、高さ約4.0mを測る。現状では3段築成と推定できる。

館ノ山塚

堀田城東側の「館ノ山」上、標高約55mの地点で確認した。径約6.5m、高さ約1.0mの円形のマウンドであるが、性格等は不明である。

堀田大久前遺跡

昭和41年、堀田川の河川改修工事で土器が出土し、遺跡登録された。昭和54年に農免道路拡張に伴う発掘調査を、水見市教育委員会が行なっている。遺構は確認されなかったが、須恵器・土師器・珠洲焼が出土しており、時期は7世紀中葉から9世紀前半頃と、13世紀頃の2時期であると推定できる。

田子城跡

奈良・平安時代の須恵器が出土したというが、詳細は不明である。

多胡城跡

白山山光照寺は、現在市内朝日本町に所在するが、文明末年から安永9年(1780)まで越中多胡に所在し、中世一向宗の大寺院であったという。本遺跡は、橋本芳雄氏がその旧所在地と推

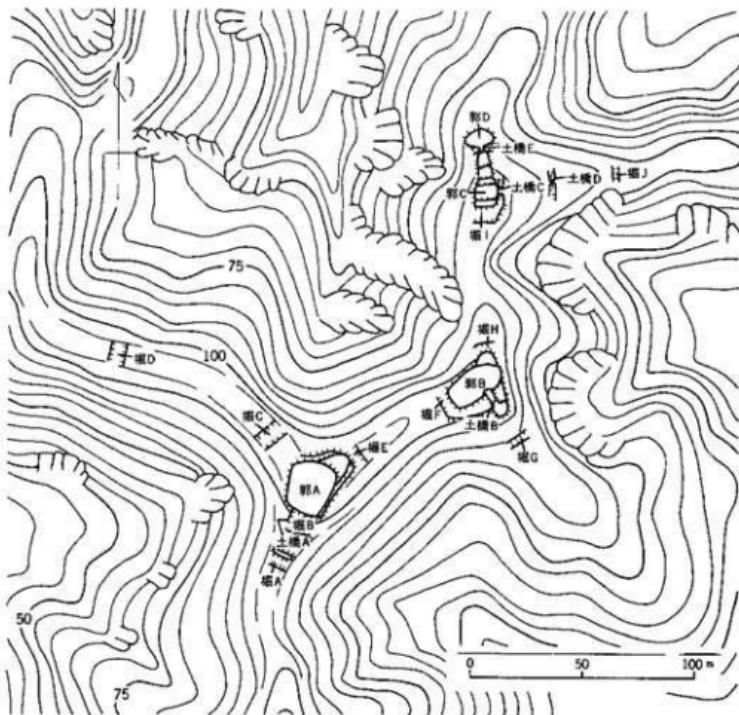
定している地点である〔橋本、1981・1986〕。現在のところ光照寺に直接結びつく遺物・遺構は確認されないが、台地西南部に「殿干場」、その北側の台地下に「巻城」という小字が残っている。^{註8}

飯久保城跡

飯久保城は、仏生寺川中流右岸の丘陵上に位置し、現在の飯久保集落の南側にあたる。その標高は約70mであり、麓との比高差は約60mである。現状で確認できる遺構は、郭・土塁・堀切・井戸であり、特に北側大手登り口途中の土塁は拠形状になっている。城主と伝えられる狩野中務については、詳細不明であるが、永禄年間(1558~70)までにはこの城に居城していたらしい。尚、麓の集落には「城飯久保」「城ノ下」という地名が残っている。

堀田城跡(第4図参照)

^{註9}近年新たに確認された城跡である。現在の堀田集落南側の丘陵に位置し、標高85~100m、麓



第4図 堀田城略測概念図

との比高差65~80mを測る。規模は南北約200m、東西約230mにおよび、現状で確認できる遺構は、郭A・堀切10・土塁2・土橋5である。

郭Aは標高約105m、広さは 24.5×22.0 mであり、主郭と思われる。北東方向に長さ8.2mの段状施設があり、郭Aの東南側と北側は、回廊状に幅5.0~6.0mの平坦地がめぐる。その平坦地と郭Aの比高差は4.0mである。

郭Aの南側尾根の守りとして、堀切A・B、土塁A、上橋Aが設けられる。堀切Bは郭Aの南に接するが、堀の西側を土橋状に残し（これを上橋Aとする）、東に向かって少しずつ深くなる。幅は10.3m、最も深い地点で深さ3.0mを測る。土塁Aは堀切Bから南へ8.9mの地点に位置し、高さ1.0m、幅2.5mである。堀切Aは土塁Aに南接し、幅6.6m、深さ1.6m、底から土塁上までの高さは4.0mである。

郭Aの北西尾根の守りは、堀切C・Dによる。堀切Cは郭Aから11.8mの地点で、幅6.7m、深さ3.0mである。堀切Dは堀切Cから尾根を80mほど進んだ地点に位置し、幅6.8m、深さ3.0mを測る。

堀切F・Eは郭Aと郭Bの間の守りとなる。堀切Eは郭Aの段状施設と尾根を切断し、幅7.0m、深さ2.0mを測る。堀切Fは堀切Eから約35mの地点に位置し、幅5.8m、深さ2.5mで郭Bに接する。

郭Bは標高約100mで 26.1×13.1 mの広さである。南側に幅5.0~7.0mの回廊状平坦地がめぐる。その平坦地上に長さ7.2m、幅3.0mの上橋Bが設けられ、郭Bに接するあたりがすり鉢状に落ち込んでいる。土橋Bの東南に接して長さ5.5mの段状施設があり、そこから9.8mの地点に、幅4.7m、深さ2.5mの堀切Gが位置する。

郭Bの北側の守りとして、長さ6.2mの段状施設と堀切Hが設けられる。堀切Hは幅4.2m、深さ1.5mを測る。

郭Cは郭Bの北、標高約90mに位置し、広さは 7.0×9.5 mである。南側の守りとして土塁Bと堀切Iが設けられる。土塁Bは幅4.0m、高さ1.0mであり、堀切Iは幅8.0m、底から土塁上までの高さ5.0mである。また、堀切Hと堀切Iの間の距離は約55mを測る。

郭Cの東側尾根の守りは土橋C・D、堀切Jによってなされる。上橋Cは長さ2.3m、幅1.7m、郭Cとの比高差4.0mである。土橋Dは土橋Cから21.0mに位置し、長さ2.7m、幅0.6m、西側尾根との比高差2.5mを測る。堀切Jは土橋Dからさらに24.0mに位置し、幅3.0m、深さ2.0mを測る。

郭Cの北側には三段にわたって段状施設が設けられ、長さは郭C側から順に3.3m、7.0m、7.6mである。上橋Eはそのさらに北側の守りとなり、長さ3.0m、幅1.0m、段状施設との比高差5.0mを測る。

郭Dは土橋Eに北接し、標高約85m、広さは 8.4×13.2 mである。

こうじら
神代城跡（第5図参照）

本年度新たに確認した城跡である。
神代集落と莆田集落の間の丘陵上に
位置し、標高60~70m、麓との比高
差50~60mを測る。規模は南北約220
m、東西約90mにおよび、現状で確
認できる遺構は郭3・堀切9・土橋
1である。

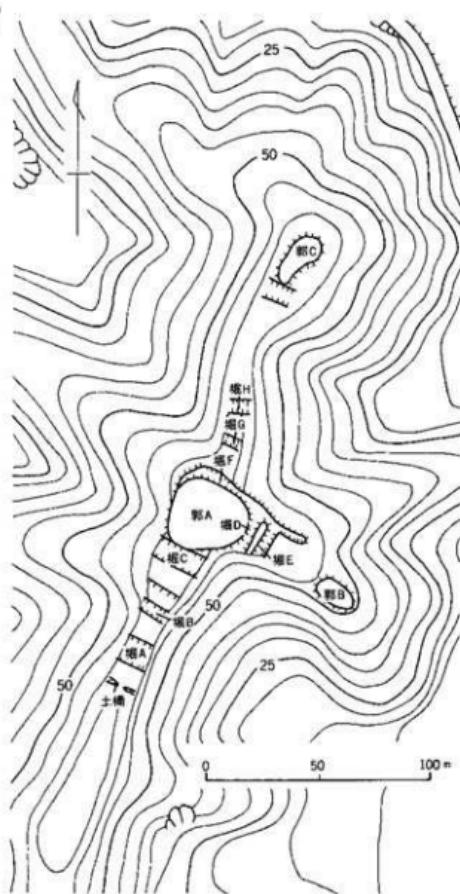
郭Aは標高70mの最高所に位置し、
広さは約30×30mであり、主郭と思
われる。

郭Aの南側尾根の守りとして土橋
と、堀切A・B・Cが設けられる。
堀切Cは幅8.5m、深さ2.5mで、郭
Aと尾根を切断する。堀切Bは堀切
Cから11mの地点に位置し、幅6.5m、
深さ2.5mであるが、北側のカットが
大きく、見かけの幅は約15mになる。
堀切Aは堀切Bからさらに12mの地
点に設けられ、幅13.7m、深さ4.0m
を測る。また、堀切Aの南側には、
尾根の両側にそれぞれ幅2.2mの切り
込みを入れて、橋状の施設を作り出
している。この土橋は長さ1.8m、幅
1.2mである。

郭A東側尾根の守りとして、堀切
D・Eが設けられる。堀切Dは郭A
に接し、幅6.5m、深さ4.0mである。
堀切Eは堀切Dとの間を、幅3.7mの
土塁状に残して設けられ、幅8.3m、深さ5.0mを測る。また、堀切り・Eの北側には、幅4.0~
7.0mの凹凸状平坦地が設けられている。

郭Bは堀切Eの東南30mに位置し、標高は約50mであり、広さは22.0×9.8mである。

郭Aの北側尾根の守りとしては、堀切F・G・Hが設けられる。堀切Fは、凹凸状平坦地の
西側延長とつながり、幅7.0m、深さ6.0mを測る。堀切Gは堀切Fから12mに位置し、幅5.2m、
深さ1.6mを測る。堀切Hは堀切Gから11.5mに位置し、幅6.5m、深さ2.0mを測る。



第5図 神代城跡測量概念図

郊Cは標高約65mに位置し、広さは23.5×12.5mで、ややいびつな形である。郊Cの南側の守りとして堀切Iが設けられ、幅7.9m、深さ3.0mを測る。堀切II・I間の距離は約45mである。

6. 結び(第1表参照)

道 跡 名	堀田 西谷 内遺 跡	堀田 大久 前遺 跡	堀田 山古墳	田子 城跡	多胡 城跡	四十 塚道跡	馬糸 古墳群	神代 羽連遺 跡	石崎 遺跡	天ノ 方城跡	神代 城跡	飯久 保山古 墳群	光西 寺山古 墳群
標高(m)	15.00	8.45	55.40	40.40	25.40	4.5	5.10	7.70	65.70				
旧石器													
新石器													
縄文													
時代	早期												
中期													
後期													
弥生時代	後期												
古墳時代	4C												
	5C												
	6C												
	7C												
奈良時代	8C												
平安時代	9C												
	10C												
	11C												
	12C												
鎌倉時代	13C												
南北朝時代	14C												
室町時代	15C												
安土桃山時代	16C												
江戸時代	17C												
	18C												
明治 大正 昭和	19C												
	20C												

第1表 堀田周辺の遺跡の年代

まず、堀田西谷内遺跡についてであるが、第1表のように、堀田大久前遺跡と時期がほぼ重複する。両者の距離は約600mである。

堀田大久前遺跡はかつての川底で、遺跡の中心はその南側にある可能性が強い。¹¹⁾ 堀田西谷内遺跡の今回の試掘調査地は、谷底から1~2段高い水田であるが、水路工事での遺物は谷底の水田の下から出土しており、標高は大久前遺跡とさほど変わらない。両遺跡の関連が今後問題となるところである。

また、堀田大久前遺跡からは11個体の須恵器杯蓋が出土しているが、そのうち7個体の表面に黒が附着しており、硯に転用されているのが確認できる。識字層の存在は、今後遺跡の性格を検討する上で、重要な点であろう。(第6図参照)

次に、周辺の遺跡について少し述べたい。

神代羽連遺跡や石崎遺跡の立地する平野一帯は、かつて布勢水海と呼ばれる広大な潟湖であった。この布勢水海は南側から少しずつ陸化し、今では十二町潟としてわずかにその痕跡を留めているにすぎない。堀田周辺では古墳時代に入ると遺跡が急増している。このことから、古墳時代には布勢水海の陸化がかなり進行しており、人々によって開拓の手が加えられていたことが、推測できよう。

その後堀田周辺では、織錦と人々が生活を営んだようであるが、平安時代後半に一時衰退するようである。そして鎌倉時代に再び人々の痕跡が示されるが、南北朝時代

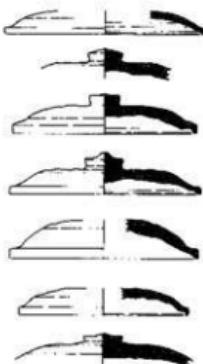
以降は詳細不明である。ただ、注目すべきは城郭の存在である。

堀田城と神代城はその構造と立地により、戦国期のものと考えられよう。両城跡は谷をひとつ隔てて位置し、その間はわずか600m余りである。また、堀田城跡の南東約3.5kmには守山城跡が遠望でき、神代城跡の西方約1kmには飯久保城跡が、さらに飯久保城跡の西方約1.3kmには惣領砦推定地が所在する。飯久保城と惣領砦については、狩野(加納)中務が鞍骨山に本城を構えたとき、惣領と飯久保に支城を置いたという伝えがある〔森田、1973〕。狩野氏は永禄3年(1560)頃、神保長職に服属していたという〔高岡、1981〕。堀田・神代・飯久保・惣領の4城跡は、ほぼ一直線に並んで立地しているが、このことは神保氏の支城網を考察する上での、新たな資料となるであろう。

そして、近世に入ると改めて村立てが行なわれ、それが現在の
第6図 堀田大久前遺跡出土
集落に結びついていると思える。

以上に紹介した遺跡の大部分は、地表には遺物が散布せず、水路工事などでその存在を知りえたものである。このことは逆に、当地にはまだ数多くの遺跡が地中深く、良好な状態で遺存する可能性を示している。堀田地区周辺の歴史は、まだまだ解明される余地があり、資料の増加をまって改めて検討したい。

追記：本書に収録した資料の大部分は、山岸太一氏と故児島清文氏の業績を基礎にしている。特に「堀田村史」を構想されながら、志半ばに逝かれた児島氏の遺稿は、水見市立博物館に寄贈されており、いずれまとめられて、発表されるであろう。本書にはとりあえず、児島氏の調査による堀田地区周辺の小字地図を掲載させていただいた。参照していただければ幸いである。

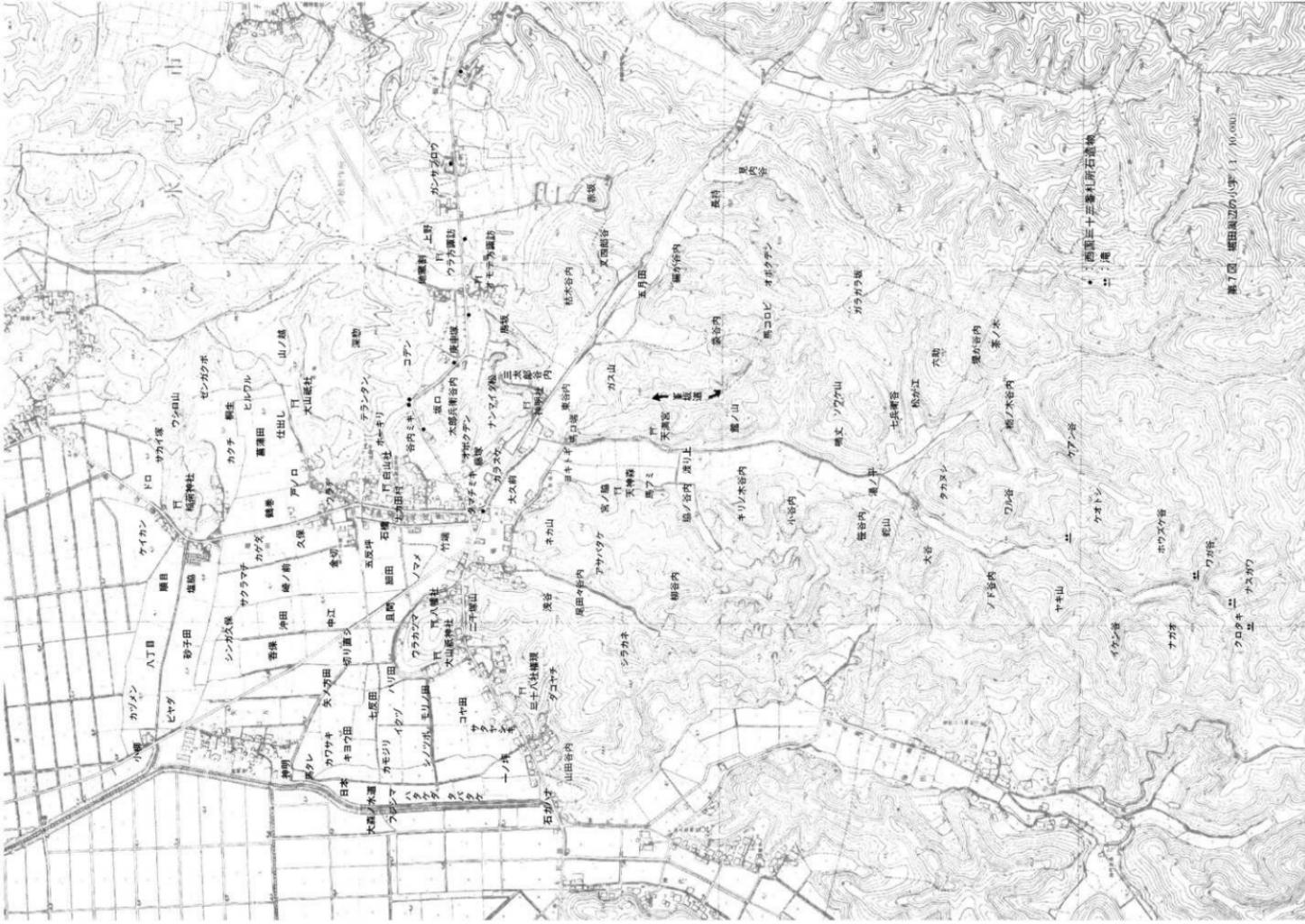


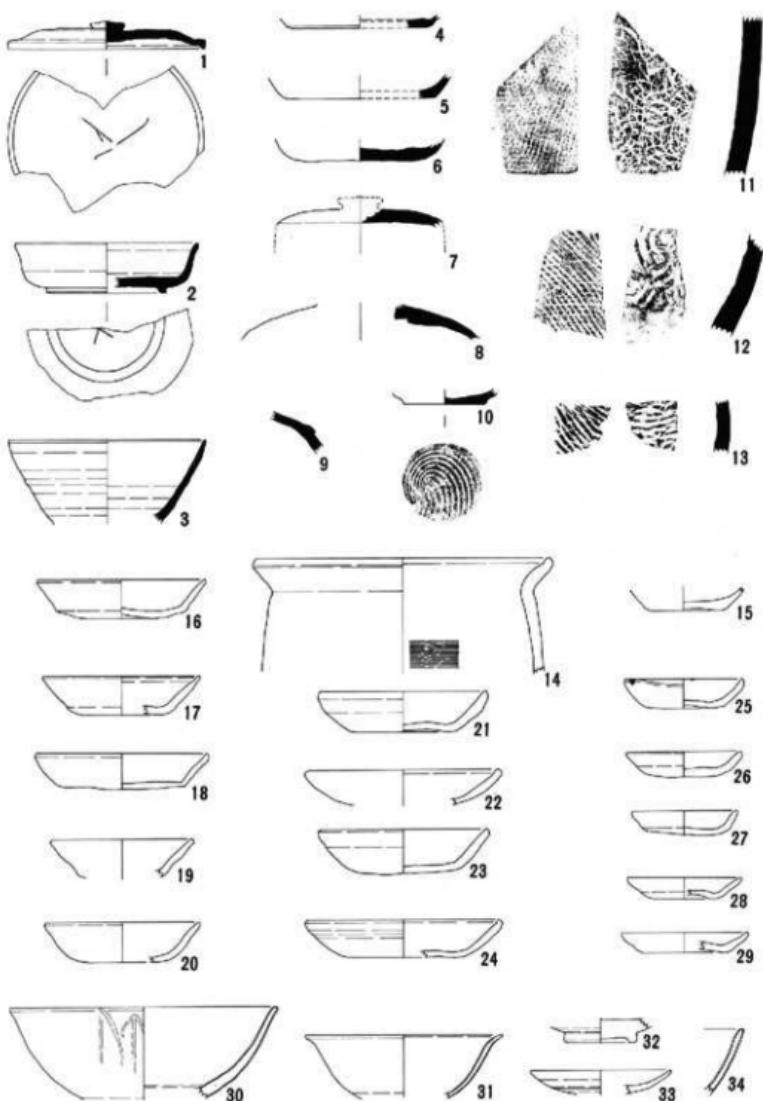
註

1. 山岸太一氏の御教示。
2. 遺跡地図番号86であるが、地図には誤った地点に記されているので、本書で訂正しておく。
3. 遺物については、宇野隆夫氏の御教示を得た。
4. 故児島清文氏のノートと、西井龍儀氏の御教示による。
5. 昭和63年3月に大野が確認した。
6. 昭和63年3月に大野が、小境卓治氏、山岸太一氏と共に確認した。
7. 昭和62年12月に大野が、山岸太一氏と共に確認した。
8. 小境卓治氏が昭和54年に行なった調査による。
9. 昭和59年に岡本恭一氏が、昭和62年に高岡徹氏がそれぞれ確認されている。昭和63年3月、高岡氏作図の概念図をもとに大野が略測し、作図した。尚、略測にあたっては、富山大学考古学研究室学生沢辺利明・安英樹・高村幸江の各氏にご協力をいただいた。
10. 昭和62年12月に大野が確認し、昭和63年3月に略測し、作図した。尚、略測にあたっては、小境卓治氏と山岸太一氏にご協力をいただいた。
11. 調査を担当された小境卓治氏の御教示。

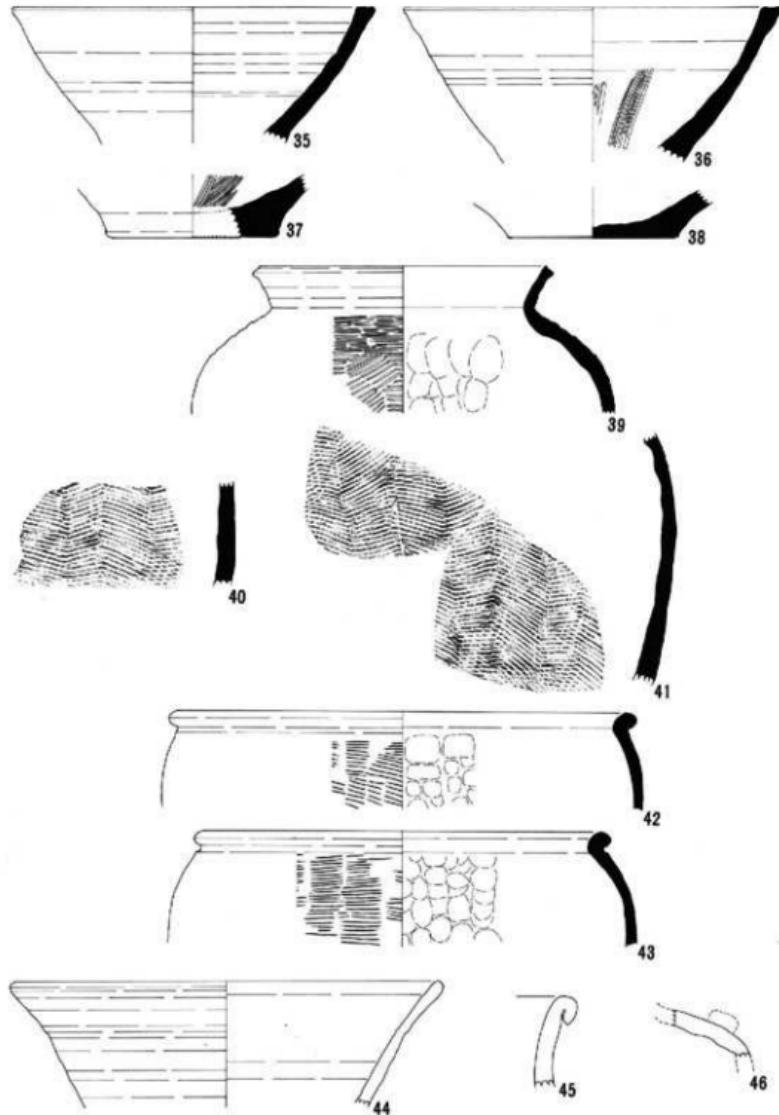
参考文献

- 宇野隆夫・岡田保良・泉拓良・五十川伸矢 1981 「京都大学埋蔵文化財調査報告Ⅱ」
京都大学埋蔵文化財研究センター
- 小境卓治 1980 「富山県水見市城田大久前遺跡発掘調査概報」 水見市教育委員会
- 高岡徹・久保尚文 1980 「富山県『日本城郭大系』第7巻
- 高岡徹 1981 「城館研究の視点(1)(2)」『富山史壇』第76・77号 越中史壇会
- 高森正 1985 「東旭山光西守跡」
- 富山県教育委員会 1979 「昭和53年度富山県埋蔵文化財調査一覧」
- 橋本芳雄 1981 「越中多胡城の合戦」『富山史壇』第75号 越中史壇会
- 橋本芳雄 1986 「水見の白藤山光熙寺について」『富山史壇』第90号 越中史壇会
- 水見高校歴史クラブ 1961 「故郷の城址」
- 水見高校歴史クラブ 1964 「富山県水見地方考古学遺跡と遺物」
- 水見市教育委員会・水見市立博物館 1983 「水見市遺跡地図」
- 渕長 1970 「四十塚遺跡緊急発掘調査と埋蔵文化財の破壊」
- 渕長 1972 「四十塚遺跡」『富山県史』考古編
- 森田祐圓 1973 「越中史徵」復刻版
- 吉岡康暢 1977 「加賀・珠洲」『世界陶磁全集』3





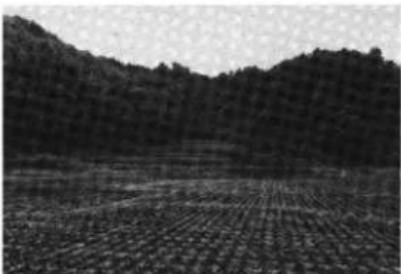
須恵器(1~13)、土師器(14~29)、中国製磁器(30~34) 比尺1%



珠洲焼(35~43)、その他(44~46) 縮尺1%、42・43のみ1/2



堀田西谷内遺跡（北東から）



堀田西谷内遺跡（西から）



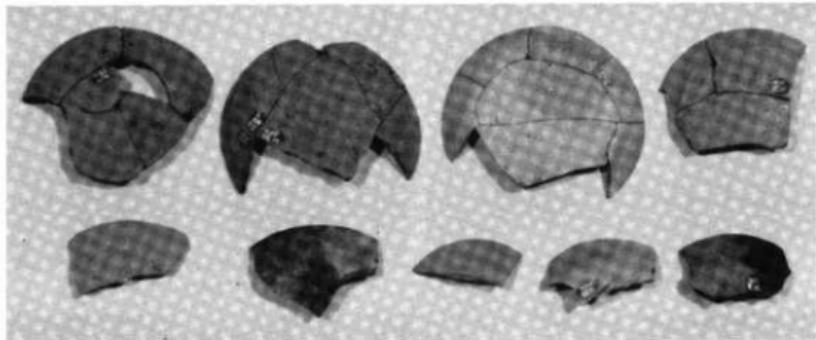
31 ドレンチ（南から）



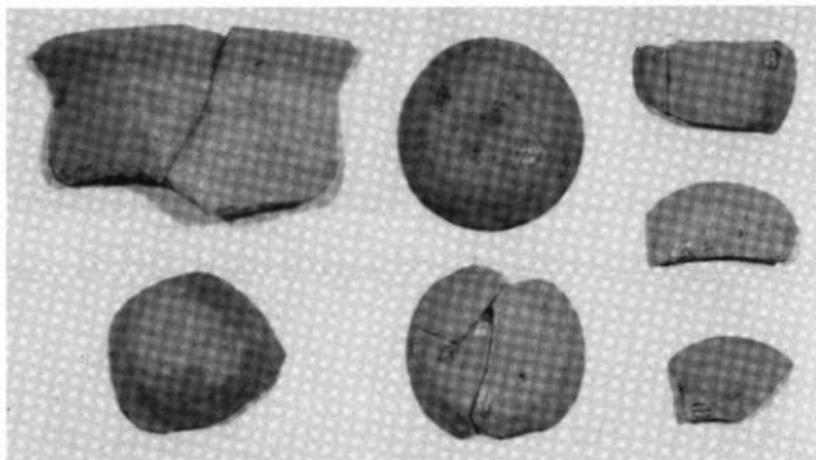
32 ドレンチ（北から）



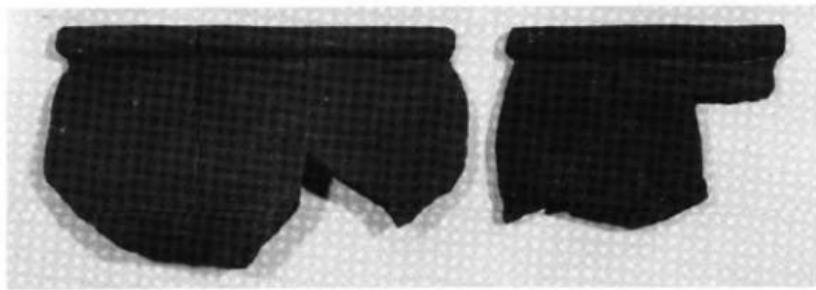
須恵器



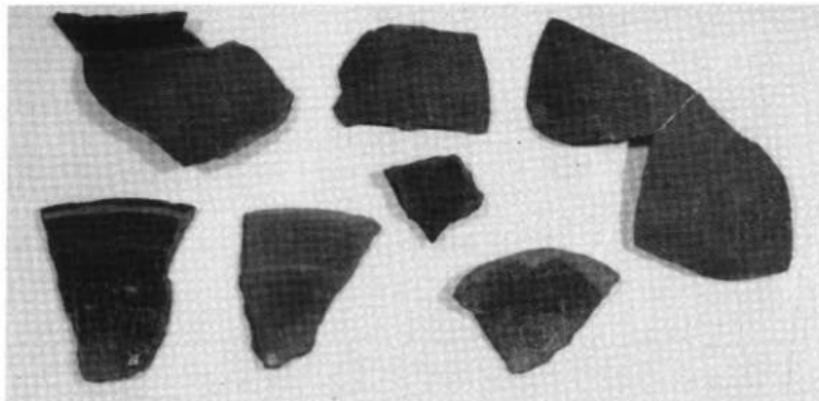
土師器(1)



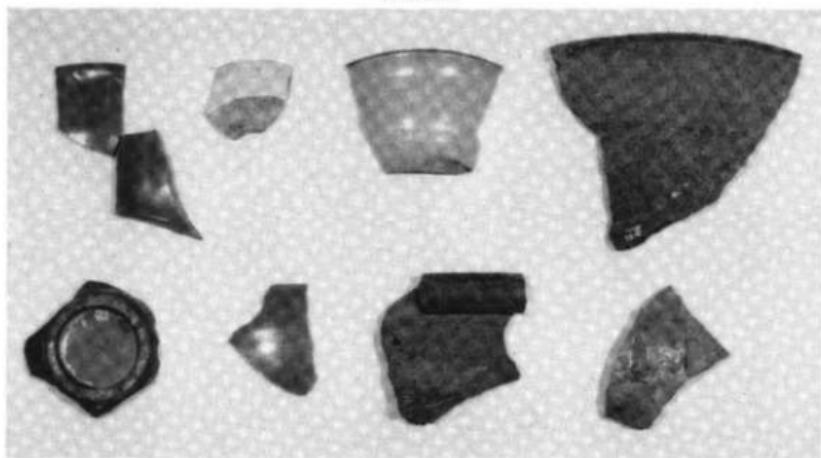
土師器(2)



珠洲燒(1)



珠洲焼 (2)



中国製磁器・その他

昭和63年3月25日印刷
昭和63年3月31日発行

富山県水見市
堀田西谷内遺跡試掘調査報告書

編集・発行 水見市教育委員会
印 刷 アヤト印刷株式会社